

夕顔

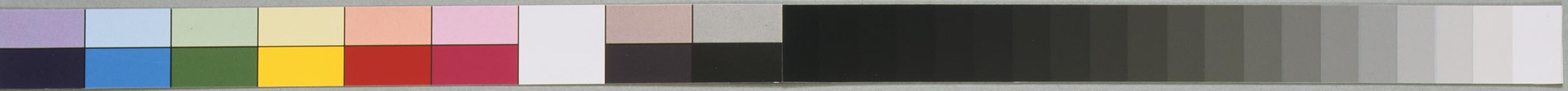
観世流謡曲 元和卯月本

58-001

58 夕顔

国立国会図書館





是^口興及國^口わ^口る僧^口てん
 板も^口浦^口を^口ら^口る^口種^口の^口勝^口也
 たる^口と^口い^口て^口た^口れ^口も^口高^口子^口穿^口山
 今^口目^口も^口又^口立^口玉^口佛^口岡^口は^口美^口ら^口り^口也^口
 思^口作^口 ^{廿二}都^口よ^口を^口き^口る^口前^口に
 美^口作^口も^口た^口り^口あ^口し^口も^口高^口子^口穿^口の^口林^口也

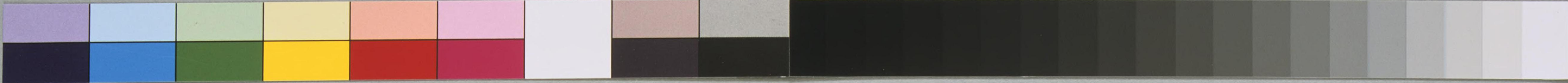


夕日影ふらふら秋草の華
螢の光をよめて 夕暮の社伏
たうとく 虹の森もちりて夜
宿あり在屋の月やあふれとわ
きあが原のわらわらあめ
中らあめよそそそそそそ
あふれ

己より有きごとくあふれ
屋敷にわらわらあふれ
あふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれ
あふれあふれあふれあふれ

竹と染とカサ 夜ハ又春來
可も名をさるるさ行端の志
若志のありくがほまわとを
紫式部り筆の流した行し
の院とつわぢ直しよの直た
世とならもあも扱心りつら
さもまもまもまもまも下 後の

魚の世りらりちとあはとも
あも 後下 面もわらふららの浮
雲をさるるあはりのまり
まもり月し晴よまはあま
さしよありあま下 たるふ
目見ぬあまよ事りし事り人
何のよそ下 権後を行く



院と書きて具名をらすにありは
 りとておれも定はかりおし融大氏信
 分りより何あると具世を聞か
 克丹^せ又^たく^はけ^りの^まり^の露^のよ^うに^おも
 る^ふ思^ひを^かか^りて^おも^はら^るる^に
 手宛^りの^かき^もち^わも^らる^るに^おも
 せ^らる^るに^おも^はら^るる^に
 院と書きて具名をらすにありは

院と書きて具名をらすにありは
 りとておれも定はかりおし融大氏信
 分りより何あると具世を聞か
 克丹^せ又^たく^はけ^りの^まり^の露^のよ^うに^おも
 る^ふ思^ひを^かか^りて^おも^はら^るる^に
 手宛^りの^かき^もち^わも^らる^るに^おも
 せ^らる^るに^おも^はら^るる^に
 院と書きて具名をらすにありは



扱い昔もちかぢもたれりあふるふりよ
我いらもき及の國の者真玉かけ
の出かりたがひて今又夕顔の白
ゆ珍り世語をかきしり珍り松
も及あおらもさらき松
深氏の物しし言葉と繁葉を
きした葉ももしらとあもも

日ころ言松心をすめしまもと
深いく指りらもも語つたまも
中もも興の顔の表におし勝て
あらある情れ道も清かす葉
珍りと隆のもも可し道に珍り
よのつし寧り中宿しわわ
まのもほの便りさらしり



車あり川を
のちのあやむらぬ信
たぢり小家地ある街のつまよ嘆
のちたる花のふもえあふふ
夕飲りおすしらとつん人の心
のちのちの情をまきるもの
葉のちをあらと尋ねる園の
扇のちもよまは秋のそらとふ

おららるる厚目の道みせの
言のちも世はかりつらあ
もる静態の命あたる福もあ
枝のちも言もそる雪のま
く家故郷の木の影もつら
かきまきたくこ中火のま
思ふもつら海をわらう

はまのさきさき夕顔のまぎのつゆ
のほろすきさき本つぎの世語を
かきくあつりひるりかきく
まもさつりうらな秋のせき
かたて池の水草よ埋まら
がらたつ松の陰くらさき
はまの鳥のかし声なまら見わたる

はまのさきさき夕顔のまぎのつゆ
のほろすきさき本つぎの世語を
かきくあつりひるりかきく
まもさつりうらな秋のせき
かたて池の水草よ埋まら
がらたつ松の陰くらさき
はまの鳥のかし声なまら見わたる

下母
夕の霞のまゝのまゝ
上
用ひは草の

下母
花の心
夜は男子のなごひ

まはるをばらけの袖を
今

まはるをばらけの袖を
今

音羽のなごひのまゝ

下
あはれをばらけのまゝ

あはれをばらけのまゝ

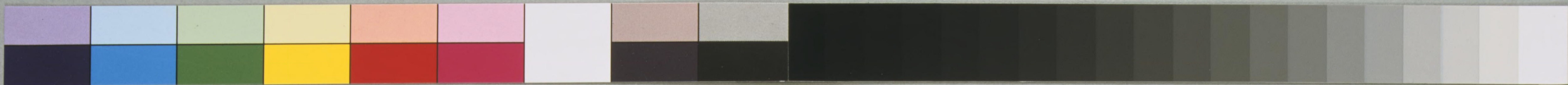
あはれをばらけのまゝ

あはれをばらけのまゝ

あはれをばらけのまゝ

右百番之内有象形直
傳石岡が左妻の音早句付
依波板起程心今清書
加奥少平

元和六年 観世左近大夫
卯月日 首宗



観世流謡曲 元和卯月本

58-012

58 夕顔

国立国会図書館

